

赤谷の森だより



AKAYA PROJECT

赤谷プロジェクト地域協議会
助 日本自然保護協会
赤谷森林環境保全ふれあいセンター

第 5 号



様々な歴史を刻む (小出俣エリア)

コラム* 赤谷の森から

一本の木の生涯

赤谷森林環境保全ふれあいセンター所長

中 村 隆 史



我々人間が自然と向き合うとき、巨樹や巨木と呼ばれる木は、その存在自体がなぜか神聖なものに感じられます。日本全国、

巨樹・巨木と呼ばれる木はたくさんあり、その歴史や大きさの故に人々の関心を集めています。しかし、巨樹・巨木でなくとも、木の生い立ちには幾多の歴史を経てきているものも多く、その足跡をいたるところに見ることができません。

例えば、フジなどのツル植物に幹を締め付けられ、苦しんでいる木を見たことはありませんか。かと思えば、巻き付いていたツ

ルの方が先に枯れ、締め付けられることから解放されたものの、ツルが腐り落ちた後の螺旋状の傷跡が痛々しく幹に残っている木もあります。

あるいは、岩の上。どうしてこんな厳しいところにな？と思うような場所で育っている木があります。たまたま、岩の隙間の土にタネが落ち、芽生えたのでしょうか。それとも、昔、根が土の中にあつた岩を包んで育つたものの、時とともに土が流され、いつの間にか岩の上で生長する羽目になってしまったのでしょうか。

また、根元が二股に分かれ、まるで二本足で立っているような木もあります。倒木の上に着いたタネが、倒れた木をまたぐように大きくなるうちに倒木は腐ってなくなり、2本足の木になったのでしょうか。

正解は分かりませんが、いろいろな想像には限りがありません。

木の様々な表情を見て、試練の中を生きてきたであろう過去を想像してみる。「赤谷の森」では、このような様々な歴史を刻んできた木に出会えます。

一本の木の生涯に思いを馳せてみるのも楽しいものです。

赤谷プロジェクト紹介

大型猛禽類の調査を通じて

「赤谷の森」には狗鷲(イヌワシ)と熊鷹(クマタカ)が棲んでいます。イヌワシやクマタカは生態系の食物連鎖の上位に位置する生物なので、山岳部で開発計画があると、しばしば環境影響評価(環境アセスメント)の対象となります。

「赤谷の森」でも、1990年代前半、ダムやスキー場建設計画があった時に「新治村の自然を守る会」が中心となってイヌワシ・クマタカの生息状況調査が行われました。この調査活動を通じて、イヌワシ・クマタカは「赤谷の森」の豊かさや健全性を示す指標としてとらえられるようになってきました。このため、赤谷プロジェクトでも自然再生を行うための基礎研究や効果を測る際の指標種として取り上げられています。

しかし、イヌワシやクマタカがどのような猛禽類なのか、「赤谷の森」には何ペアが棲んでいるのか、「赤谷の森」のどの地域をどのように利用しているのかを知っている人はそう多くないかも知れません。そこで、今回は「赤谷の森」のイヌワシとクマタカについて、簡単に紹介したいと思います。

(1) 「赤谷の森」の猛禽類

「赤谷の森」にはさまざまな生物が生息しているため、これらの生物を獲物とする猛禽類の種類も多

く、これまでイヌワシ・クマタカをはじめオオタカ・ハイタカ・ツミ・ノスリ・ハチクマ・サシバ・トビ・オジロワシ(冬に1回のみ)の10種が記録されています。

(2) 猛禽類調査のねらい

赤谷プロジェクトは自然再生がテーマですので、猛禽類調査では、イヌワシとクマタカが「赤谷の森」をどのように利用して生活しているのかということに着目するとともに、自然再生による森林の変化が猛禽類の生息状況にどのように影響するのかを継続して調査します。このことにより、生物にとっても人間にとっても、より良い森づくりをすることが目的です。

(3) イヌワシとクマタカはどのような猛禽なのか?

イヌワシ



イヌワシ

イヌワシは翼を広げると2mにも達する勇壮で大きな猛禽です。スコットランド、スカンジナビア半島、ヨーロッパアルプス、ヒマラヤ、モンゴル、

アメリカ大陸の中北部など北半球の高緯度地域に広く分布し、その精悍な風貌、並外れた飛翔能力、獲物を捕殺する力強さから、王家の紋章に使われるなど、古くから人々に畏敬の念を持って見つめられてきました。主な生息場所は、中小動物の多い自然草地や低灌木が広がる開けた植生と、巣をつくる岩場が存在する山岳地帯です。翼を自在に動かすことで、風を巧みに操り、広い行動圏を効率的に飛行し、主にキジやライチョウの仲間、ノウサギ・ジリスなどの獲物を探します。

世界的には日本のような森林に覆われた山岳地帯にイヌワシが生息していることはきわめて珍しいことなのです。日本でイヌワシが生存できたのは、夏緑(落葉)広葉樹林や自然草原・岩場の存在に加え、人間活動による空間をうまく利用してきたことによると考えられます。「赤谷の森」には、豪雪・強風により低灌木しか生育しない尾根部や雪崩により樹木が生育しない急斜面などがあります。また、上流部に広く存在する広葉樹林は多くの中小動物を育むだけでなく、落葉すれば獲物を発見することが容易になりますし、わずかな空間を利用してその獲物を捕獲することもできます。さらに、薪炭林のように、人為的に伐採が行なわれていた所も狩り場として利用していたものと思われる。

クマタカ

クマタカはイヌワシよりは少し小型ですが、「熊鷹」の「熊」には強いという意味があるように、幅広く、果敢で力強い翼を持った大型の猛禽です。イヌワシとは異なり、主に熱帯雨林や亜熱帯雨林



クマタカ

に生息する森林性の猛禽です。クマタカ属の猛禽10種の内、7種は東南アジアに生息し、その内の「クマタカ」が分布の北限である日本に生息しています。クマタカ属の猛禽は主に森林内やその周辺でさまざまな中小動物を捕食しています。このため、狩りは、森林内に止まって獲物が出現するのを待ったり、林内を転々と移動して獲物を探索したりすることが多いものです。そして、獲物を見つけたら幅広い翼を強く羽ばたき、ダッシュして獲物に急襲します。また、巣は大きな樹木につくられるので、クマタカが生息するには、中小動物が豊富で、営巣可能な大きな樹木が存在する森林が必要なのです。

間により利用されてきた森林も利用して生存してきた猛禽なのです。

(4)「赤谷の森」のイヌワシとクマタカ

これまでの調査で、「赤谷の森」には1つがいのイヌワシと4つがいのクマタカの生息が確認されています。不思議なことに自然林が多く残っているとされる「赤谷の森」の源流部にはクマタカのつがいは確認されていません。必ずしも、森林の質だけでなく、イヌワシの行動圏（なわばり）が関係しているのかも知れません。

「赤谷の森」とイヌワシ・クマタカの関係が明らかにするには、どのような環境でどのような獲物を捕食しているのかを明らかにすることがとくに重要な課題です。クマタカのえさ調査からは、カケス・アカネズミからノウサギ・ヤマドリまで実にさまざまな中小動物が獲物となっていることが分かってきました。また、4月下旬頃からはヘビが巣に持ち帰られ、夏の主要な獲物のひとつとして利用されていることも明らかになってきています。

(5)これからの調査の課題

イヌワシは行動範囲が広いだけでなく、調査が困難な県境部付近も行動範囲にしているため、正確ななわばりや季節ごとの狩り場はまだ正確には分かっていませんでした。このため、2007年からは日本イヌワシ研究会の協力を得て、多くの調査者が広範囲に展開し、同時に観察を行う合同調査を実施してこれらを明らかにします。

クマタカは、なぜ「赤谷の森」の源流部には繁殖ペアが生息していないのかを明らかにするとともに、どのような環境を狩り場として利用しているのかを明らかにするためのデータをできるだけ多く蓄積していきます。

さらに、自然再生においては、人間のくらしとの関わりをどのようにしていくのかを考えることも重要です。古くからこの地域に生息しつづけているイヌワシやクマタカが人間のくらしとどのように共存してきたのかを調査することも重要な課題であると思っています。地元の方々の経験談もぜひお聞かせください。



猛禽類の調査（左より二人目が筆者）

山崎 亨 赤谷プロジェクト猛禽類モニタリンググループ座長、アジア猛禽類ネットワーク会長、クマタカ生態研究グループ会長、日本鳥学会鳥類保護委員、滋賀県在住

*猛禽類の写真提供者は、高野 丈氏



関係者紹介

このコーナーでは、赤谷プロジェクトの関係者(団体)を紹介します。

今回は、「財」日本自然保護協会」について紹介します。

日本自然保護協会(略称をNACS・J「ナックス・ジェイ」といいます)は、全国2万4千人の会員からの会費や寄付で運営している民間活動団体(NGO)です。昭和24年に尾瀬をダム開発から守るために結成された「尾瀬保存期成同盟」が母体で、その2年後に日本自然保護協会に名前を変更しました。原点は尾瀬にあり、群馬県の自然とは少なからず縁があります。

事務所は東京・茅場町にあり、26人の職員が働いています。とても小さな組織ですが、全国の会員や自然観察指導員の方々とともに、活動しています。職員は、各地で起こる自然保護問題を解決するために全国を飛び回る者や、活動に協賛を得るためにネクタイを締めて企業まわりをする者など、担当業務によって働き方は様々です。日本の自然を守るために、全員が使命感を持って取り組んでいます。

赤谷プロジェクトでは、総合事務局として、プロジェクトの窓口を務めています。多くの職員が赤谷プロジェクトに関係する業務を担当していますが、主担当は3人です。

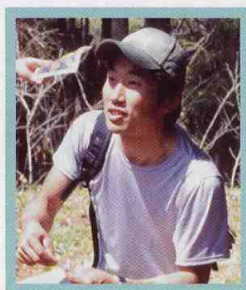
茅野 恒秀



東京近郊で生まれ育ちましたが、高校時代に外国旅行中、ヘリに乗って川の源流部へ行き、ラフティング(筏)で下るツアーを体験して、自然や自然保護に関心を持ちました。赤谷に通い始めて丸4年、出張回数は通算で120回を超えました。

大学では社会学を研究していました。赤谷プロジェクトを通じて、森の生物だけでなく、地元の人々が元気になるしくみを、つくってきたいと思います。

出島 誠一

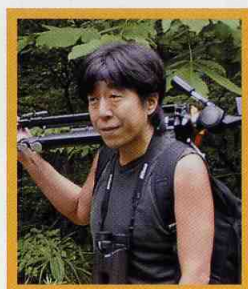


島根県生まれの大阪育ち。システムエンジニアとして働いていましたが、副業のシーカヤックのインストラクターや、アウトドアスポーツ

を楽しむなかで、自然保護に強く関心を持つようになり、日本自然保護協会です仕事をすることになりました。

赤谷の森に通い始めて3年が経過します。この森を通じて、日本の森とそこに暮らす人の営みの魅力を再確認することができました。その魅力を高め、多くの人に伝えることに、皆さんと一緒に取り組みたいと思います。

横山 隆一



東京出身。小さな頃から生き物や自然に関心を持ち、高校の生物科の教員を経て、日本自然保護協会の職員となりました。職員となって25年、現在は理事(役員)を勤めています。

赤谷プロジェクトでは、自らのライフワークである野生動物(イヌワシやツキノワグマなど)の調査研究や、環境教育プログラムの立案を主に行っています。



■赤谷プロジェクトに望むこと

高等学校における環境教育

群馬県立尾瀬高等学校
自然環境科主任

松井 孝夫

群馬県沼田市出身。平成九年
より尾瀬高校勤務。平成十年
より現職。

「学校教育における環境教育」

昨今、小さな子どもから大人まで、様々な年代に応じた環境教育が展開されています。小中学校においては、多くの学校が当たり前のよう環境学習に取り組んでいます。高等学校においては、やや特殊な分野のように感じられており、積極的に取り組んでいる学校は少ないです。しかし、その必要性や得られる成果を理解している高校は、それぞれのスタイルで工夫して環境教育に取り組んでいます。

尾瀬高校のように、自然環境科という専門学科を設置し、特化した環境教育を行う高等学校においては、次のようなねらい・目標が適当であると考え、実践しています。

「多様で複雑な環境問題を理解し、解決に向けて行動するためには、問題を全体的に捉える必要があります。環境に関する知識の習得に加え、感性や倫理観、多面的に物事を考え自ら課題を見つける能力、問題を多角的に分析する能力、様々な主体間の調整を行うために互いにコミュニケーションを図る能力などを育成していくことが必要です。このため、『体験を通じて、自ら考え、調べ、学び、

行動する』という過程を重視した学習を推進します。（環境基本計画2000年より抜粋）

知識や技術の習得だけにとどまらず、説得力のある言動で、考え方や立場の異なる主体（個人や団体、あるいは国など）に、正しい情報に基づいて適切に判断した自らの考えを理解してもらい、高いコミュニケーション能力が必要であると考えています。

「尾瀬高校の環境教育」

尾瀬高校の自然環境科では、「総合尾瀬」「環境実践」「環境測定」「野外の活動」などの七つの環境専門科目を設定し、尾瀬や武尊山を中心とした地域の豊かな自然環境を活かした環境教育に取り組んでいます。その中核をなすのは毎月の校外実習です。ここでは、「多様な自然の中での多様な体験」を重視しており、尾瀬や武尊山、片品溪谷などの豊かな自然環境の他、前橋の敷島公園などの都市公園やキャンプ場、里山環境や沖縄のやんばるの森など、様々な環境下での観察や調査を実施しています。休日を利用した課外活動では、多様な環境や人との出会いを求めて、群馬県外にも足をのびし、活動しています。その中でも、近年注目しているのは「赤谷の森」を拠点とする「赤谷プロジェクト」であり、関わりを持ちたいと考えています。

昨年十一月には、「いきもの村」などを会場に、赤谷プロジェクトの概要についての講義や、「植生管理」の調査活動に大学生らとともに参加させていただく機会を得ました。専門家や大学の教授らからの指導など、貴重な体験をさせていただきました。

この日だけでも、このプロジェクトには、様々

な立場の主体（人や団体）が関わっていることを実感できました。

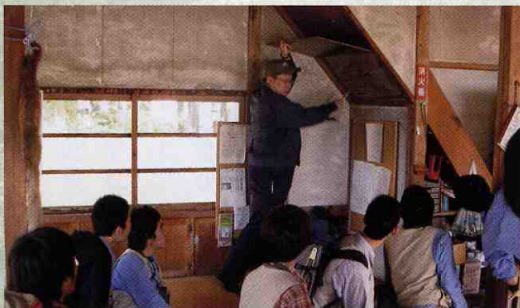
このように、本校が目指す環境教育での要点は、①多様な環境下で、②多様な主体（個人や団体など）の指導のもと、③多様な体験を積み重ねることです。これらを通して、物事を多面的に捉え、分析する能力が高められるからです。

そして、多くの人との交流を通して、多様な価値観や互いの立場を理解した上で、議論ができる高いコミュニケーション能力を身につけて、多様な環境問題に立ち向かってほしいです。

「赤谷プロジェクトへの期待」

赤谷プロジェクトは、こうした環境教育の要件がそろっているのが特徴であり、その環境や関わる方々に大変魅力があります。

このプロジェクトの広報活動が成果をあげ、多くの若者が赤谷プロジェクトの多くの活動に関わることを期待します。



尾瀬高校生への環境教育の様子

イベント等の紹介

NHK教育番組

モリゾー・キッコロ 森へ行こうよ!!

in 赤谷の森

いきもの村での撮影の様子



「赤谷の森」にあらわれたモリゾーとキッコロ



放送スケジュール (予定)

NHK教育 土曜午前9時~9時15分

- H19. 4月 28日 赤谷の森の動物紹介
- 5月 12日 ノウサギ
- 6月 16日 ムササビ・コウモリ
- 6月 30日 両生類
- 8月 11日 総集編 (前半)
- 9月 8日 //
- 10月 13日 ニホンリス
- 10月 20日 動物の冬支度
- 12月 8日 落葉後の森
- 12月 15日 鳥類
- H20. 2月 2日 総集編 (後半)
- 2月 9日 //

谷の森」を舞台として順次放送されます。番組では、プロの自然案内人と猿ヶ京小学校の子供たちが「赤谷の森」の自然や動物の四季を楽しく紹介していきます。「赤谷の森」が舞台となる放送スケジュールは次のとおりです。是非、放送をご覧ください。

NHKの子供向け教育番組「モリゾー・キッコロ 森へ行こうよ!」の撮影が「赤谷の森」で進められています。この番組は4月からの新番組で神奈川県「鎌倉の森」、愛知県「海上の森」、そして「赤

プロジェクトサポーター募集のお知らせ

赤谷プロジェクトでは、野生生物の棲みやすい森づくりと持続的な地域社会づくりに取り組んでいます。

基礎データを収集するため、「赤谷の森」に棲む猛禽類やホンドアンの調査、樹木種子の豊凶調査等の調査活動や、地域の伝統文化である炭焼き等を実施しています。

一緒に活動に参加していただけるサポーターを募集しています。知識や経験がないと心配される方がいらっしゃるかもしれませんが、勉強・研究の機会を豊富に用意しています。興味のある方は、最終頁の日本自然保護協会へお問い合わせください。



サポーター活動 炭焼きの材料運搬

NHK総合テレビ 「さわやか自然百景」

NHK総合テレビの「さわやか自然百景」で「赤谷の森」が紹介されます。番組は「赤谷の森」に棲む動物たち、そして、動物たちを育む貴重な「赤谷の森」の様子を、新緑の季節の中、美しい映像で描いていきます。放送は、5月27日(日)午前7時45分～8時です。こちら是非ご覧になってください。

お知らせ

●地元関係者で構成する赤谷プロジェクト地域協議会では、猿ヶ京、永井、吹路地域の水源となっている「赤谷の森」の「ムタコ沢」の自然観察会やボランティアでできる森林整備等のイベントの実施を予定しています。

●前号で紹介した日本イヌワシ研究会との合同調査は、6月1～3日の予定でしたが、10月6～8日に変更となりました。

赤谷の森 自然散策

赤谷センターでは、主に群馬県内の自然や環境に興味のある方を対象に、「赤谷の森 自然散策」を計画しています。

「赤谷の森 自然散策」は、「赤谷の森」(旧新治村相模地区)を、案内人の解説を聴きながら散策し、楽しみながら森林のしくみや動植物について学ぶことができます。皆様のご参加をお待ちしています。

赤谷の森 自然散策の日程等

第1回	H19. 5/27日	場所 小出俣沢流域
テーマ	「赤谷の森の森林植物・動物」	
第2回	H19. 10/28日	場所 小出俣沢流域
テーマ	「赤谷の森の森林生態・植物」	
第3回	H20. 2/17日	場所 いきもの村
テーマ	「冬の森林・冬芽の観察・フィールドサイン」	

募集要項

- 参加資格 小学4年生以上 (小中学生は保護者同伴)
- 参加費 無料
- 集合場所と時間
 - ①関東森林管理局(前橋市)9時出発
 - ②利根沼田森林管理署(沼田市)9時50分出発
- 終了時間 現地で15時30分の予定
バスで集合場所へ戻ります
- 服装など 森林散策のできる服装(長袖、帽子、スック)・昼食・飲み物・雨具持参

申し込み締め切り
実施日の4日前まで

申し込み・問い合わせ先
赤谷森林環境保全ふれあいセンター
TEL.0278-60-1272

紹介



相模森林事務所
森林官
藤代 和成

はじめまして、こんにちは。4月から「赤谷の森」を管理する相模森林事務所に、森林官として着任しました藤代和成と申します。

北海道の釧路市出身・A型・水瓶座の27歳(独身)です。趣味は、映画鑑賞(ホラーとラブロマンス除く)、音楽鑑賞(歌謡曲からJAZZまでなんでも)、お酒(焼酎以外なら何でも)、料理(下手の横好き)など。改めて並べると妙にインドアな趣味が多いですが、もちろん山は大好きです。

前住地では、群馬県・旧倉沢村(現在高崎市)で森林官をしていました。倉沢の森は、人工林が多く森林経営が盛んな土地で、「赤谷の森」との違いに驚いています。

こちらに赴任して僕にも関わらず、

ニホンザル・ニホンカモシカ・ホンドテン・ノスリ・ムササビに遭遇し、豊かな自然が多く残されていることに感動しました。生態系の積極的な保全・復元と、ローインパクトな森林経営のあり方について学びながら、仕事に反映していきたいと思えます。

また、相模森林事務所に住み込み、常駐していますので、近隣の方々と交流し、赤谷プロジェクトに対する地域の目も養って行きたいです。

森林環境教育にも興味があり、森林インストラクターも受験中(4科目中あと2つ)。

何分知識が乏しく勉強しなければならぬことばかりですが、赤谷プロジェクトにおいて様々な方々と交流し、ご指導いただけると嬉しいです。

全国的にも知名度の高い画期的な本プロジェクト。「赤谷の森」が、人と生物の共存できる豊かな森に、またこれからも全国に広がって行くであろうプロジェクトのより良い前例になるように、微力ながら一生懸命頑張りますので、よろしくお願いたします！

編集部だより

今年、「赤谷の森」を紹介するテレビ番組がいくつか放送されます。

NHK教育番組「モリゾー・キッコロ 森へ行くこうよー」の撮影では、地元の子供達がいきいきと楽しそうなのが印象的でした。多くの方々

自然豊かな「赤谷の森」や赤谷プロジェクトの取組を知って頂くよいきっかけとなり、地域づくりに繋がることを願っています。

(赤谷の森のツツペ)